

第1回 第四次高知県子ども読書活動推進計画策定委員会 議事録（要旨）

1 日 時 令和3年2月16日（火）14：00～16：00

2 会 場 オーテピア高知図書館 4階 ホール

- 3 議 事
- ・委員長及び副委員長選出
 - ・第四次高知県子ども読書活動推進計画策定について
（策定の趣旨、スケジュール等の確認）
 - ・第三次計画の成果と課題について
 - ・第四次計画の基本的な考え方及び論点について
 - ・その他

4 参加者 別紙のとおり

5 委員会議事録（要旨）

- (1) 開会挨拶（高知県教育委員会事務局教育次長 長岡 幹泰）
- (2) 第四次高知県子ども読書活動推進計画策定について（資料3、別紙1）
事務局説明（三鶯課長）
- (3) 第三次高知県子ども読書活動推進計画の成果と課題（資料4、資料5、参考資料3）
事務局説明（三鶯課長）
- (4) 第四次計画の基本的な考え方及び論点について（資料4、資料6）
事務局説明（清川課長補佐）
 - ・基本的な考え方
 - ①子どもの読書活動の意義の明確化
 - ②子どもの読書活動における重点的な課題への対応
 - ③社会構造の変化に対する読書活動の在り方
 - ・第四次計画の論点
 - 前提の再確認
 - ①読書の定義
 - ②読書の目的と効果
 - 重点課題（第三次計画からの継続）
 - ③親子間・家庭内での読書活動の推進
 - ④自主的、自発的な読書活動の推進（不読率の減少）
 - ⑤読書環境の充実
 - ⑥子どもの読書活動を支える人材の育成
 - 社会構造の変化
 - ⑦ICTの発達、GIGAスクール構想下での読書活動の推進
 - ⑧コロナ禍による生活様式の変化に対する読書活動の在り方

花房委員：分かりやすく案を作っていただいている。これをもとに委員で練っていただければよい。

読書の目的については、何が良いのかということ子どもに明確に伝えていくことは難しい。読書から離れないように生きていってほしいというのが親としての願いである。

SNSという楽しめるものがあり、身近にコミュニケーションを取ることのできるツールがあるがゆえにこのことについてのルール作りも必要。

読書の目的は子どもの精神的発達、男女の性差というところでも異なるのではないかと子育てをしていて思う。成長していくと、友人からのすすめなどからも興味を持ち始めることもある。

重点課題の③については、身近な保護者が読書活動を重要視しているかというところで大きく差がつくところである。こどもの図書館で読み聞かせボランティアの振り返りを行った。熱心な保護者は自発的に図書館に行き、本を借りたり、読み聞かせに参加する。興味関心のない保護者はタブレット等を使い、見せるだけなど一方通行的なコンテンツで子育てをしている。保育園からも悩みとして出ていた。産婦人科は出産の際に必ず行く場所なので、そこで読み聞かせの重要性を伝えてもらうことが有効ではないだろうかと思う。

加藤委員長：読書の目的という形で切り出すのが良いかどうかとも考えてみるべき。「～のため型」で子どもを引っ張るのは難しいと思う。委員の皆さまは、「読書は面白い」という体験を持っている。計画なので目的は必要であるが、それを前面に出すかどうかとも考えてみるのも良いと思う。答えはなかなか出ない、5年間はこういう目的を設定してみないかという形が妥当ではないか。

八木委員：読書の定義は悩ましく思う。特別支援教育に携わる者としては、読書って何だろうと思う。障害が重い生徒には、学齢があがり高等部になっても0～2歳児の本を読み聞かせている。それはどうなのだろうという疑問を持つこともある。もっと学齢にあった本をと考えるが、難しい内容になると生徒の心に届きにくく、繰り返しの楽しいリズムのある絵本がその生徒の心に届くのであれば、それが読書だとも思う。そういった悩ましい場面を教室等でよく見かける。

生徒にとって読書とは何か、在学中は教員が読み聞かせできるが、卒業後はどういった場面で読書に関わることができるか、本の世界をずっと感じながら生きていけるか、という部分についても考えていければと思う。

⑦のGIGAスクール構想下の読書活動の推進についても考えていきたい。紙の本ではない、読み聞かせではない、生ではない音声で届けることの課題など。ただ視覚障がい者にとっては、生の声ではなく、点字でもない、音声の有益な情報を得ることができる機会である。このこととの兼ね合いもある。難しい問題ではあるが、最初の定義をしっかりとすることで広がりができるのではないかと思う。

加藤委員長：事務局として、いまのご指摘について何かあるか。

健常者の読書を中心に考えてしまうが、今のご指摘は極めて重要だと思う。読書の定義はどうしても文字を自力で読めることが前提になっている面がある。そこを見直すだけでも、かなり新しい視点を打ち出せる。

三觜課長：委員長のおっしゃるとおり、これまでは紙の本を読むということが暗黙の了解で進んでいった面もある。このことも含めて議論いただき、第四次計画の中で、新しい視点を持って、施策を進めていければと思う。読書の定義を再確認させていただき、目的と効果

についても議論していただければと考えている。

武市委員：意義の明確化等について、この会に参加するにあたり、司書の集まりで問いかけをしてきた。具体的にどのような教育的効果が得られるかについては多少疑問もある。脳科学者や教育学者等の調査研究の発表があれば、そういうこともあるのかと思うところもある。なんとなくこんな効果があるのでは、ということしか思い浮かばない。難しいところである。読書とはどのような行為か、との定義であるが、色々な話が出たが自分自身は文字を読むことが読書と感じているが、全体的に学齢期以上を対象として考えているのではないか、と思う。学齢期であつてもと言う発言もあつたが、私たちは学齢期でないいわゆる赤ちゃんからと考えている。この場合「読み聞かせ」という「聞く読書」も読書の範疇に入れていいのではないかと考える。先ほどの特別支援のお話を聞き、乳幼児だけではないかと改めて思ったところである。

G I G Aスクールについては、それほど詳しくないので、改めて教えていただけるとありがたい。

加藤委員長：今の質問である、G I G Aスクール構想について少し説明をお願いします。

三觜課長：一人1台端末の整備が小中学校で進んでいる。おそらく今年度中に一人1台端末が配備される。この一人1台端末と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする児童生徒を含め、多様な児童生徒を誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化された創造性を育む教育を学校現場で持続的に実現させる構想である。この端末を使い進めていくのであるが、どのように効果的に進めるのかはこれからの部分もある。何分生涯学習課であるので、細かに説明は難しい。所管している小中学校課の中屋指導主事をお願いします。

中屋指導主事：先ほどの話のように、文部科学省が進めている施策であるが、コロナ禍になる前から進めてきていた。コロナの影響で急速にデジタル化を進めている。現在県内の小中学校では、3月までには一人1台持つように配備を進めている。同時に教員を対象とし、デジタル端末の活用についての研修を展開している。4月からは、端末やデジタル教科書を使いながら、学習指導要領の主旨である主体的・対話的で深い学びを進める補助ツールとして活用研究をしていく段階である。

加藤委員長：タブレットをどう利用するか議論は進んでいると思うが、タブレットの利用の仕方に、読書がどのように関わっているか、分かれば教えてほしい。例えば、電子書籍をできるだけ早い学年から読ませるとか古典ならば著作権の切れたものもあると思うが、その活用の指導をするなど具体的に上げられているのかどうか。

山崎館長：タブレットを活用した読書活動の推進であるが、現在、教育政策課が中心となり、一人1台端末のパスワードを発行する作業を進めている。併せてオーテピアが持っている高知県電子図書館のパスワードを同時発行できないか取り組んでいる。可能なら県内の小中、県立高校の児童生徒に高知県電子図書館のパスワードを発行できることになる。タイトル数については、全体で約5,700くらいあるが、それ以外に電子図書館のリンクの中には、青空文庫など著作権が切れて無料で、同時に多くの生徒が閲覧できるシステムがある。様々な形で子どもたちにタブレットを活用した読書活動を推進できると考える。

山重企画員：高知県電子図書館は基本的には公共図書館であるので、1つの電子書籍は一人の生徒しか活用できない。従来型の同じテキストを全員に見せることには向いてない。お金をかければできるが。分担してみんなで共同して行う、探究的な学習には活用できると思う。教える側の工夫が必要である。その方が時代には合っていると思う。

加藤委員長：「聞く読書」という一見矛盾した言葉ではあるが、非常に良いヒントをいただいたと思う。このアイデアを育てていくという方向で計画を進めると、新しい読書像が見えてくるのではないかな。

西田委員：定義の確認であるが、確認してから進めるのか、確認しながら進めるのかの疑問がある。GIGAスクールについてはよく分かった。私は幼児教育センターであるので、読書の手前の基礎にあたる部分であると考え。文字を読む手前の段階であるので、最終的には読書につながるのであろうが、読み聞かせは愛着や信頼関係につながる、人間として大事なところを育てていると考えている。出産の際や健診受診時などに絵本を楽しむということを伝えることができるのではないかと考える。幼児であれば年長に近づくにつれ、文字や数字に関心を持ってもらいたいという思いもある。幼児に対して絵本を提供するにあたり、まだ字を読めない子どもたちは、絵をとっても熱心に見ている。そして大人が驚かされる発想をすることがよくある。そういった体験は必要だと思う。またイメージ力を育むためには、言葉から想像することも大切。視覚支援も必要な反面、耳で聞くといったことも必要なのではないかなと思う。

加藤委員長：今、読書について聞いていく中で、委員の皆さまにもいろいろなイメージがあることがわかる。読書の定義付けをしていく際には様々な価値観が含まれる緩やかなものになるようにしてほしい。特に読書の対象となる素材、「文字を読まなければいけない」や「聞くのも読書である」ということが大きな論点になる。事務局の方で気をつけていただければと思う。

塚地委員：昨年、高知県内の中学生約1,300人に生活実態のアンケートをした。放課後、休日、祝日に行っている行動ベスト3は何ですか？と聞いた。1位は「スマートフォンでYouTube視聴」で50%超えであった。2位は「スマートフォン又はゲーム機でゲーム」が50%、3位が「友達と遊ぶ」で40%超えであった。ちなみに「マンガ以外の本を読んでいる」は14%だった。「マンガ・雑誌を読んでいる」も低く30%いなかった。活字から離れているという実感であった。こういったことを踏まえて、資料6を見ていた。マンガも読まない、マンガ以外はさらに読まない状況の中、読書とは何か、読書の目的と効果とは何かと考えると、活字と紙ベースのものを楽しむか、活用できるかともっと広く個人の発達段階や特性で、ユニバーサルに考えてもいいのかなと、前提の再確認を考えた。これまで話された視覚障害の方、知的障害の方、低年齢の子どもたちなど多様な人のことを含めて、音声ガイダンスによる朗読、マンガも活字がある、触る絵本などすべて読書であると思いたい。オーテピアにあるものはすべて本であると思っている。

4つ目の論点（自主的、自発的な読書活動の推進）につながると思うが、高知市内の小学校はオーテピアに見学に来る。中学生になつての見学はないかな？

山崎館長：中学生も高知市以外もある。

塚地委員：GIGA スクール構想もあり、デジタルの時代になり、なかなか来られない子どものために VR で見学などは可能か？

山重企画員：実は VR もある。ホームページで見ただけならば。

塚地委員：遠隔で結ばれるのは当たり前になるので、素敵な図書館や館内を見られて、子どもたちが「これ借りたいな」と思えるようなことができないかと考える。

3つ目の論点（親子間・家庭内での読書活動の推進）については、私としては否定的である。高知県で家庭の教育力に何かを頼るといふことには個人的に不安がある。高知県の家庭は共働きが多く、家の人に時間がなく、経済的に厳しいという実情がある。そこで読むお手本になる大人、読み聞かせ、不読率の減少を考えるのであれば、個人的には学校に尽力してもらいたい。朝読書など様々な取組をしている学校は多い、読書の良さを知った子どもたちが読み聞かせボランティアの経験をしていき、自分たちが親になった際に、読み聞かせは大事であるという文化を形成し、連鎖的につながる形を構築していただきたい。

加藤委員長：事務局から何かあるか。

山重企画員：VR について、本の書面まで映すのはかなり大変である。YouTube もかなりアップロードしている。子ども向けの動画は分かりやすいと思う。図書館として YouTube を否定しているわけではない。

加藤委員長：委員のご意見のように、オーテピアの資料はすべて本だというのは面白いアイデアだと思う。読書とは何が基準だろう考えた時、ベースになるのは文字言語であろうが、実際に読者に接する時には音声や視覚化されたものになっていることもある。しかしベースは文字言語として考えられた資料、それに接することを読書とするというくくり方すると、色々なものを取り込みやすい。まとめる際には、具体的で中心的な典型例もあるが、そこから周辺に及ぶというのが実際である。そういう意識で色々なものをくくる枠組みを持って考えると良いのではないか。オーテピアには何を収集しているのかというと、本とそれに類するもの、いわゆる形あるものであろう。最初からその場で消えてしまう音声言語をベースに考えているのとは少し違うと思う。音声のものを文字化して改めて文字言語の資料として使われるものなどもある。こういったことを少し考えてみると塚地委員のご指摘をまとめやすくなり、また理解しやすいのではないかと考える。

上岡委員：よく本を読む生徒に「どうして本を読むのか」と質問をした。私自身は単純に好きだからとか面白いからと答えているが、その生徒は「スポーツが苦手で、本の方が良かった」との答えであった。次いで「図書館にはよく行くか」の問いには、「よく行く」との答え、「なぜか」の問いには「一人でいられるから」であった。いろいろな生徒がいる中で、図書館や図書室が居場所になっていることは確かで、救いになっている。読書が有益であることは同感である。様々な形で読書に出会っている子は問題はない。読まない子が多く、その子たちに何とか読む環境を整えていくとなった時、県全体をみてもかなり環境は整ってきていると思う。次は実効性として読み聞かせも含め本に触れる機会をどのように作るか、である。この取組もずいぶんしてきていると考える。読書は個人の楽しみであるとともに、つながるものでもあると考えている。感想文にすることや人と面白

さを共有したり、ビブリオバトルをしたり、集団読書などで感想を言い合うなど、仲間の思いなどを共有することが、読んだことのない本を手にとることにつながる。個人の楽しみや居場所を残しながら、ありきたりではあるが「つながる」ことが必要だと考える。この「つながる」が家庭に求めにくいのであれば、乳幼児期に子どもと保護者に聞かせることや高校生が園児に読み聞かせをすること、また調べ学習など使う場を作ることが必要。それぞれの学校でできることでよいと思う。一人1台の端末についてもどう使うかに今は一生懸命である。使うと有益、便利であるというものにならなければいけない。「使うために」の発想であるが、ビブリオバトルの際に端末を使うなど、工夫はできる。これもつなぐ1つであろうと考える。

定義や目的も大切だと思うが、なかなか難しい。ただ2の①の「県として求める読書の姿を明確にする。」ということが非常に気に入った。県として読書で子どもたちの成長に何を求めるのか、どんな姿を求めるのか。そこでの目標値や求める姿にするためにどのようなことをしていけばよいのか、を考えていければと思う。

内田委員：楽しいも定義であると思う。どういう定義をしたらいいのかという方が興味としては大事である。これが定義だという形にしてしまうと、それもそうだろうが違った定義の仕方もあるのではと思ってしまう。上岡委員もおっしゃったが、読書は個人的なものでもあると同時に集団的なものであるという定義もできる。個人の作業だけではなく、みんなのものという定義づけをして発信していく。このことは読みたくなるような環境づくりの1つであると考え、定義も環境づくりの1つなので、その視点で考えることも必要。

塚地委員の意見を聞くと、三次から四次に移る中で学校の先生の役割の視点が少し弱くなっているのではないかと考える。「情報を読み取り活用する子ども」というところは、学校の出番だと思う。自主性・自発的でとどめてしまっている。もっと学校の役割を打ち出せないか。例えば第三次の成果と課題のところでは質問したいところがあり、「資料4の2枚目中段」の課題、「基本目標2 取組方針3」の課題に「教科によっては、学校図書館資料の活用の難しさを感じた学校も多い」とあるが、どこが難しかったのか、なぜ難しかったのか、もう少し踏み込んだ分析があってよい。何か図書館資料の難しさがあり、そこをどう変えていくかという方向性が今回出てもよいと思う。

地域でも学校を支援する活動が多くある。地域学校協働本部の活動が高知県は92%である。何をしてくれという具体的なものはないが、そこに読書を位置づけることは可能だと思う。南国市の稲生では「読み聞かせ」を「読み合い」という。年齢を超えてお互いに読み合っていく、まさに集団的な活動になっている。ちょっとした工夫ができそうな気がする。

GIGA スクールは、プラス思考でいくことが良いと思う。影の部分はあるが、どこにいてもどんな場所でも情報を受けられる、距離のハンディを超えられる可能性がある。この可能性を追求することが大切と思う。

加藤委員長：質問もあったが、事務局答えられるか。

中屋指導主事：ご質問のあった「資料4の2枚目」の課題であるが、左下にある「探究的な授業づくり

のための教育課程研究実践事業」と「学校図書館を活用した『読み』を鍛える拠点校事業」の指定校が課題として出してきたものである。聞き取った中には、主要5教科のうち、算数・数学以外は教科書の補助的な資料として様々な形で活用ができたが、算数・数学は資料と関連付けて活用することが難しかったとの意見があった。また単純に学校図書館に算数・数学の資料が整備されにくく、活用できなかったとの意見もあった。算数・数学に活用できる本はどんなものがあるかとの相談を受けたこともあった。

内田委員：「難しさを感じた」の真意が、積極的な意味で難しさを感じたことがわかり、安心した。教師が使いたくなり、どんどん使えば使うほど課題が見えてくる、そういった状態になっていることがわかり、むしろいい方向であると思う。今の話で、前向きに使えば使うほど難しさを感じるということなので、良いと思う。

岡林委員：「前提の再確認」①の読書の定義について、学校教育においては、ここに書かれている「図鑑、俳句・和歌集、落語などのカテゴリーの違いによって『読書』に当たるかは個人の読書観による。」とあるが、学校はすべて読書ととらえている。また国語の教科書の挿絵も読書である。算数の図表を使い授業を展開したことがあるが、これらの図表についても読書ととらえたい。

読書の目的について、読書環境を整えるという話がありました。来年度中に計画を策定し、結果をすぐに出さなくてはいけないと考えると、学校の存在は大きく、どう取り組むかは重要であると思う。

家庭内の読書活動の推進について、これは長い目で見て、高知の文化力をあげていくことが必要であると思う。学校は子どもの幸福のためにあると考えている。子どもの幸福はどこにあるか、と考えた時、大人の幸福の近くにあるとも思う。大きな話になるが、高知の文化力をあげることは、高知の幸福につながると思う。前にも言ったが、読み聞かせの重要性は、親になってからでなく子どもの時に知っておくことが必要。自身の小さい頃に経験があるにこしたことはないが、高校生の頃に体験することで、読み聞かせの重要性を知っていくこと、自分で感じていくことができると思う。

長岡次長が最初の挨拶でおっしゃっていたように、「読書の楽しさや大切さを体感する」ことが重要であると思う。幼児期、小学生の頃に自分の一冊があるというのは大きい。読書感想文コンクールの表彰があったが、表彰された子どもたちに共通することは、「それぞれの本をとおして、自分の経験や体験につながり、そこから新たな知識を得、次のステップへ進み、大きな成長があった」ということだった。こういったことを一度でも体感している子は、何かあった時に読書への原点がある。

本はすぐに答えが出ない、今の社会は不安感があり、子どもも大人もすぐに答えが欲しい。インターネットはすぐに答えが出る。こういった社会の中、大きな課題は「読解力」ではないだろうか。学校現場でも「読解力」を育てていくことが大事であると感じている。新聞や様々な資料、図表をとおしたものの見方、考え方を身につけていくことが大切である。このようなことを身につける学びを子どもたちに「やりたい」と思わせるには、人とのつながり、関わり、相手意識を持たせた取組が必要。子どもたちが楽しさや大切さを体感できる取組を考えていきたい。

オーテピアに来て、「楽しかった」という経験をするのも、読書についての大きな役割であると思う。例えば、自由にオーテピアで何かを探し、見つけたことを周りに紹介したりするなどの体験があってもよいと思う。

GIGA スクール構想であるが、タブレットは子どもたちに「珍しい」と思わないほどに活用させるという流れになっている。使い切って文房具のような感覚を持ってからスタートである。

加藤委員長：第四次の計画を作る、これは重要なことであると思うが、これがどこで話題になるのか、と考える。読書というものがもっとあらゆるところで話題になるそういう文化に変える努力が我々に必要であると思う。もちろん学校は一つの拠点である。家庭で話題になることが望ましいが、家庭によっては難しい面もある。一番大切なのは行政関係の委員会であろう。教育関係以外でも読書はどうなっているという話題になるように、作成する側としては努力していくことが必要であろうというのが感想である。世間一般は我々が考えるまでにはなっていないのが実情であろう。マスコミ等にも読書という話題で取り上げてもらうことも一つの手段である。PRをしていく方向性も必要である。

(5) 閉会挨拶（高知県教育委員会事務局生涯学習課長 三觜 美香）